

二次元ぷち文庫

魔界プリンセス

フェリス



斐芝嘉和

表紙イラスト: 明地雷

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『魔界プリンセス ラーニャ』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



魔界プリンセス
フェニヤ

斐芝嘉和
表紙／明地雷

登場人物紹介

Characters

ラーニャ

魔王の娘のサキュバス。紅髪と小生意気な吊り目が魅力的な美少女。

ルイ

ラーニャ専属のメイド。魔界に堕ちてきた人間で、マゾ気質。

アマデウス

ラーニャの参謀役。魔王の座を狙って策謀を巡らす。

「だあつしやあああつ！」

豪快な叫びとともに放たれた大量のManaが、群れていた魔物たちを遙か彼方まで吹き飛ばした。ポツカリ開いた広場の中央、厚底ブーツを履いた細い脚で仁王立ちするのは、紅髪をショートカットにした小柄な少女。背中には小さなコウモリの羽根を生やし、尻から伸びる尻尾の先には鍬型のカエシがついている。申しわけ程度に膨らんだ胸元や小さな尻を水着のように締めつけているのは、金具で過剰に飾られた黒革の拘束衣。爛々と光る双眸は悪戯っぽい吊り目で、八重歯が可愛い口元には意地悪そうな笑みが浮いている。

細身で小柄な美少女——いや、美小悪魔は、

「やあねえ、その程度!! チンポコついてんの!!」

薄い胸を反らし、腰に手を当てて、偉そうに哄笑した。胸元や耳朵を飾る魔晶石のアクセサリーがキラキラと輝いているのは、周囲に漂うManaを集めている証。いずれも、精練度数六百万を越える国宝級の魔装具だ。

普通の魔物が持っている魔装具は、精練度数百程度。上級魔神ですら十万を越えるモノを持つていれば羨ましがられる。なのに、六百万超をみつつもよつつも——このチンチクリンでペチャパイのお子様小悪魔、ただの小悪魔ではない。

「なんか言った？」

ゲシッ!

言葉と同時に繰り出された厚底ブーツの爪先が、足元に蹲っていた少女の尻をしたたかに蹴り上げた。キャウン、と鳴いた少女は手枷足枷の鎖をジャラジャラ鳴らしつつ、痛む尻を撫でながら涙目で上目遣い。

「わ、私じゃないですう……」

「泣くな、鬱陶しい！」

ボカッ！

頭を叩かれて地面に突っ伏す少女は、メイド服を纏っていた。小柄で童顔なのは横暴な小悪魔と同じくらいだが、長く伸ばした髪は艶やかな金色で、紺色のワンピースと純白のエプロンドレスに包まれた身体はふっくらとして、胸も抱えられるくらいに大きく、尻も揉みたくなるほど肉づきがよい。

「ひどいです、ラーニヤ様。眼鏡が割れてしまいました」

「……頑丈だな、お前」

うう、と呻きながら顔を上げるメイドを、小悪魔——ラーニヤは呆れた顔で見下ろした。強力な魔装具を着けているため筋力もアップしている。いまならトロールとも互角に殴り合えるだろう。なのに手加減なく殴りつけたはずの少女は、鼻や額に絆創膏を貼っただけでケロッとしていた。割れた眼鏡も、少し目を離れた隙にいつの間にか元通り。細いうなじにかけられた鋼鉄製の首輪や鎖つきの手枷足枷に、復活の呪いがかけられているのだ。

「死ななくたって痛いんですよ？ だからあんまり乱暴は……キャウンっ!!」

「ペットの分際で、飼い主に意見するな！」

ゲシゲシゲシッ!

頭を抱えて蹲るメイドの尻を、硬そうなブーツで何度も何度も踏みつけるラーニヤ。

その背後に——ゆらり。

巨大な影が立ち上がった。マナの奔流に弾き飛ばされた魔物のひとり、牛顔の魔神だ。

「我らとの闘いの最中にペットとお戯れとは、余裕ですなあ、ラーニヤ姫」

年季の入ったハンマーを提げ、こめかみに#型の青筋をヒクヒクさせて、引き攣った笑みを浮かべる魔神。ラーニヤとメイドが遊んで(?) いる間に補助魔法を重ねがけしていたのだらう、太い首を飾る魔晶石のネットワークが目を射るほどの眩い光を放っていた。

普通なら、ハツとして身構えてもいい状況。

なのにラーニヤは、横目でチラッと見ただけ。可愛い八重歯を覗かせて浮かべるのは、傲岸不遜と言うほかはない、他者を見下しきった笑み。

「愚か者め。せっかく隙を見せてやったのに、その機会を無駄にするとは。そんなことだから、貴様は魔王になれんのだ！」

「ぬうっ!？」

「魔王の座が欲しいのなら、不意打ちでも闇討ちでも毒殺でも、なんでも試みればいい。

卑怯で狡猾、結果がすべて！　それが魔族だろう！」

バツとポーズを決めたその姿には、見る者を圧倒する威厳があった。チンチクリンでペチャパイだが、小悪魔ラーニャは先代魔王の一人娘なのだ。

「……なんか言った？」

ゲシツ！

「言つてませえん！」

答えるより先に尻を蹴飛ばされたメイドは、情けない声をあげながら遙か遠くまで転がっていった。それを見送ることもなく、ラーニャの吊り目は魔神の牛顔をニヤリと睨む。

「まあいい。もう一度チャンスをやろう」

「な、なんだと!？」

目を丸くする魔神の前で、黒革の長手袋に包まれた小悪魔の細指が己の頭を指した。

「一発殴らせてあげるわ。私を見事倒せたら、そのときはお前が魔王よ」

「ぬ、ぬうう……」

「畏じやないわよ。血族として王位を継いではみたけど、どうにも億劫なのよねえ」

重荷を振り払うように肩を揺らしたラーニャは、急にしんみりとした口調になった。自信満々だった顔に愁いが浮かび、物思いに沈んだ吊り目がスツと横へ。

「いまになって分かるけど、父は偉大だったのね。野心旺盛な魔族どもを三万二千年間も

抑えつけ、従えていたのだから——悔しいけど、私にはまだ、そんな力はない。毎日毎日、玉座を狙う者たちに襲撃され、撃退して……父を弔うヒマもないのよ」

「……姫」

牛魔神の目に、なにかが光る。

いまはこうして対峙しているが、彼もまた、つい先日まで魔王に仕えていた重臣だったのだ。一粒種のラーニヤ姫が誕生したときも城にいたし、日々成長する姿も見かけていた。さすがは大魔王ラスプーチンの娘、意地悪で乱暴者で大胆不敵、年齢の割にあまりにも悪魔らしい、と感心していたのだが、それは偉大な父王に一歩でも近づこうという精一杯の背伸びだったのか——。

「ならば、いざ！」

瞬きをして涙を消した魔神は、重そうなハンマーを力強く振りかぶった。

「御安心召されい！ 寿命が尽きるまで死なぬのが魔族。しばらく動けなくなるだけで、すぐに復活しましょうぞ！」

「うん、分かっている……ありがと、ミノタン」

どこか清々しい表情で、スツと瞼を閉じる小悪魔。

その紅い髪に向け、巨大な鉄槌が勢いよく——。

ズドオオオンッ！

大地が揺れ、放射状にひび割れた。地面が捲れ返り、立ち込める砂煙。

「……ラーニヤ姫。御立派でしたぞ」

深々とめり込んだハンマーをそのままに、牛魔神は静かに瞑目した。ゴツゴツした頬に涙が一筋、キラリ。

清らかに微笑んだ小悪魔は、宣言通り、その小さな身体で巨大な凶器を受け止めた。いくら死なないとはいえ、殴られれば痛い。肝の据わった魔物でも、そうそうできることはない。さすがは大魔王の娘、見上げた覚悟、いやアツパレアツパレ——。

「……それはまあ、それとして」

箱状の物体を横へ移動させるパントマイムをしてから、牛魔神はいそいそとハンマーを退けた。ラーニヤが復活する前に、その身を飾っていた魔装具を奪わなければ。

力がすべて、力こそ正義の魔界では、玉座に座っただけでは魔王と認められない。ラーニヤがしていたように、あらゆる挑戦を受け、打ち勝って、有象無象の魔物どもに「彼こそ魔王だ」と思わせなければならぬのだ。

そのためには、精練度六百万を超える魔装具がどうしても必要だった。死体から（死んでないけど）物を奪い取るのは、卑劣な魔族なら当然のこと。上機嫌になった魔神は鼻歌を歌いながら、蜘蛛の巣のように広がったひび割れの中央を覗き込む。

「……んん？」

ラーニヤの遺体は、なかった。

代わりに、グルグル渦巻きの眼鏡をかけたメイドがひとり、紙より薄く、ペタンコになっていた。頭の周りにはピヨピヨと、羽を生やした天使の輪が飛んでいる。

「これは、先ほどのペット……」

「名前はルイよ、覚えなくてもいいけどね」

「っ!？」

慌てて振り向こうとした牛顔が、

ガスッ!

厚底ブーツに踏みつけられた。

身代わりの魔法でメイドのルイと入れ替わり、魔神の背後を取ったラーニヤだ。

「悪いけどアンタ、魔王になるにはヒトが好すぎ!」

勝ち誇った声で叫んだ小悪魔は、蹠^{ぞうろ}踉^ろめいて低くなつた四角い顎に、

ガンッ! ガンガンガンッ!

サマーソルトキックと対空三連脚を続けざまに叩き込んだ。小山ほどもある重そうな身体が高々と跳ね上がり、やがてクルクル回りながら落ちてくる。白目を剥いた牛魔神に、もはや意識はない。

「トドメよ!」

重三重の革ベルトが解かれ、股布が捲られて――。

「おお、これはまた……なんとも可愛らしい」

現われたのはツルンとした、赤ん坊のように愛らしい秘部。マシユマロのような肉畝は透き通るほど白く、冷たい空気に撫でられてわずかにほんのり桜色に染まっている。ルイの言葉とはうらはらに、どうみてもあどけなく、幼気な割れ目だ。

「淫魔としては少々、淫らさが足りんようだな。毛も生えておらん」

「しかし、毛のないモノは感度がいいとも聞く。姫様の母君・メリエル様も、このような御秘所であらせられたのではないか？」

「く……ッ！ き、貴様らあつ！ 私のことはともかく、母上のことを……うぷつ!!」

憤った口元に、甘酸っぱく香る柔らかなモノが押しつけられ、言葉を封じられた。頭の向きを変えたルイが、下着に包まれたままの己の秘所を押しつけてきたのだ。

「いけません、姫様！ ここは抑えて……！ 魔族のみなさま、どうかお赦してください。姫様は恥ずかしさのあまり、少々混乱していらつしやるのです！」

「ほほう、忠義心に篤いメイドのようだな。面白い」

上下逆さに重なりあつたふたりの少女を見下ろし、竜人が耳まで裂けた口で笑った。ルイの手首を縛っていた葛を断ち切ると、ラーニャの秘部を指差し、

「お前が開き、弄って気持ちよくしてみせろ」

「えっ!? どどど、どうしてそんな……!!」

大切な姫様なのだろう、と、群がった魔物たちが次々と、自慢の肉棒をそそり勃たせた。竜人のソレは、巨大な鏃を連ねたよう。粘液に濡れてヌメヌメ光っているが、幾重にも重なったカエシは鋭く、ねじ込まれたらただでは済まないだろう。

木人のペニスは、文字通り木の根だった。捻れて絡み合い、ヒゲ根を生やして、細く尖った尖端は子宮口を抉るための形か。

膣奥を抉るといえば、オークのモノ。豚顔の男は肉棒までが豚らしく、尖端がクルクル螺旋状になっていた。コルク抜きのような形そのまま、回転して子宮頸管の中まで潜り込んでくるらしい。

「ンン? なんだコイツ、涎を垂らしているぞ?」

「へっ!? ああいえ、その、ちよつと、ビククリしてしまつて……」

慌てて口端を拭つたルイは、姫様の幼い割れ目を覗き込んで少し考えた。巧く弄つてイかせたほうがいいのか、下手だな、と怒らせたほうがいいのか——いや、関係ない。どうせ魔族だ、約束なんて守るはずがない。巧くできてもできなくても、結局ふたりは犯されるだろう。

ならば、愉しむまでだ。

「お赦してください、ラーニヤ様。少しの辛抱でございます」

「ば、バカッ！ やめ……ンぷっ！」

甘酸っぱく香る秘部で口を塞がれた小悪魔は、メイドの細指に秘部を掻き分けられ、耳の先まで紅くなった。贅の男を逆レイプしても物足りないとき、ルイに弄らせたり舐めさせたりして遊んだことがある。おっとりした眼鏡メイドはどこをどう弄れば気持ちよくなるのかよく知っているし、興が乗ってくるとS気も現わす。

（分かってるだろうな!? こんな連中の前で、あんなことをしたら……うつ!? あっ!?）
逆さに覆い被さった変態メイドは、恐れていた「あんなこと」を始めた。しなやかな金髪のを先を掴んで、ラーニヤのクリトリスをコチヨコチヨ、コチヨコチヨ。

「ン、ぷぷ……ン、やめ……むぷっ!!」

敏感な肉豆に閃く快感。

湧き上がる微弱電流が呼び水になったように、小指の先より小さな突起に熱い血潮がトクトクトク、と流れ込んでくる。

（ああ、クソっ！ クソオッ！）

悦びに捻れる身体、ビクン！ ビクン！ と跳ねたがる腰。

羽のように軽いタッチに快楽神経が呼び覚まされ、幼気な秘裂はたちまちジュンジュン潤んでしまった。襲の少ない淫唇はぶつくりと充血して鮮やかに赤らみ、甘酸っぱい蜜を滲ませてヒクヒク、ピクピク、と蠢き始める。

（な、なにも、恥ずかしがることはない……私はサキュバスなんだ、いやらしいのはイイことなんだ……）

羞恥に揺らぐ心に言い聞かせ、懸命に落ち着かせようとしているのに、

「豚男さん、もう一度匂いを嗅いでみてください」

「……ッ！ ば、バカ……ムプッ！」

柔らかな膨らみに口を塞がれている間に、オークが這い込んでくる気配。ムハ、ムハ、と、先ほどより遙かに昂奮した熱い鼻息が、蜜にまみれた肉華を灼く。

「ふむ。少しは牝の匂いに近づきましたな」

だがまだ小便臭い、と豚男は笑う。

「お小水の御孔が少々お緩いのでは？ アナタの髪で栓をして差し上げなさい」

「えっ!? で、でもお……」

愛蜜に濡れて細くなつた髪先を見つめ、躊躇するメイド。髪が汚れる、などと思つていゝるのではない。

（するんじゃない、するんじゃないぞ、ルイ！ したら、お仕置きだからな！）

口を塞ぐ柔肉に向け、ンモンモと命じるラーニャ。アレはダメだ、絶対ダメだ、いまだつておかしくなるくらい恥ずかしいのに、アレをされたら、あんな姿を見られたら――。

ド変態メイドは、薄布越しに感じる吐息の熱さで小悪魔の羞じらいを測っていたのだ。

頃合い良し、と見るや、

「お赦してください、姫様！」

ツプツ！

溢れ出す悦びを抑えきれずにニマニマしながら、淫核の下でヒクヒクしていた小孔に髪の毛の先を挿し込む。

「ンんううっ!? ン、うううっツ！」

桃尻の下で吊り目が丸く見開かれ、髪の毛の生え際にフツフツと、真珠のような汗の珠が浮いた。クリトリスなど比較にならないほど鮮烈な電流が、尿道を逆流して膀胱を貫く。

(ダメだ、やめろ……やめろおおっ！)

触手に割り開かれた脚をばたつかせ、ルイの重みに押さえつけられた背を必死に捻るラーニャ。しかし、尖った髪先は引き抜かれず、それどころか、さらに奥まで滑り込んできた。ビリッ！ ビリリッ！

強烈な感覚が尿道に弾け、裏側から淫核を突き上げた。男を惑わすサキュバスは美しい女性に似ているが、身体の作りは少々違う。普通の人間より淫らでなければならぬため、感じる場所も多いのだ。

お小水の御孔も、そのひとつ。

しかもただ気持ちいいだけでなく、尿意までどんどん高められてしまう。

「む……ふ、ンううっ！ や、ああンッ！ ダメ、ダメ、ダメエッ！」

しなやかな金髪で穿られた尿道に、めくるめく肉悦と羞恥の予感が膨れ上がった。
「おやおや？ どうしたのですか姫様？」

サキュバスの秘密を知っているのか知らないのか、ニヤニヤ笑いながら幼い魔姫を覗き込む魔物たち。

「まさか、オシッコしたいのですか？ 興奮めです、我慢していただきたい」

「もしもお漏らししたら、我々のコレで、たっぷりお仕置きして差し上げますよ」
グリ、グリリ！

頬に押しつけられる生臭いペニス。

紅く染まった額にも、涙を滲ませた目元にも、恐ろしい形をした肉塊が擦りつけられた。
「ふぁ、う、くううん……ッ！」

汚らわしいが、避けられない。

キュッキュ、キュッキュ、と抜き差しされる金髪にしごかれ、尿道に激感が渦巻く。裏側から根元をしごかれたクリトリスは弾けんばかりに痙り勃ち、薄皮を振り払って粘液に濡れた肉豆を露わにした。

「やつ!? ああっ！ 熱い、うう……感じ、ちゃ、うううっ！」

快楽神経の塊をフワ、フワ、と包み込むのは鼻が擦れんばかりに顔を近づけた金髪メイ

ドの吐息。

「どうしたのですか、姫様？ オシッコが出ちゃいそうなんですか？」

「ふぁううっ！ ば、バカアッ！ 喋る、なああっ！」

すぐ傍で話されると、幼いビラビラに声が反響した。潤みの底で喘いでいた膣孔がキュウツと窄まり、肉穴の奥にもついていた濃密な牝香が溢れ出す。

ズククンッ！ ズククンッ！ ズククンッ！

ピンピンに張り詰めた肉豆が狂おしく疼き、いまにも弾けてしまいそう。

「もう少しの辛抱ですよ、姫様」

「ひっ!? ひ、あああっ！ ダメダメ、動かしたら、ダメエエッ！」

シユッシユッシユッと、尿道を小刻みに前後するしなやかな髪。

繊細な刺戟は強烈な稲光となって、反り返って痙攣する背筋を何度も何度も駆け抜けた。割り開かれた脚がプルプル震え、伸びやかな太腿の筋がピーンッ！ と張る。

赤ん坊のように幼気な恥丘が艶めかしい朱に染め上げられ、引き締まった小尻がもどかしそうに跳ね踊り――。

シユピッ！

タイミングよく引き抜かれた髪が、ぷっくり膨れた粘膜花卉の端を掠めた。

「きあひいいいっ!!」

尿道孔に充満した肉悦と膀胱に膨れ上がった尿意、ビラビラの中に溜っていた淫欲——辛うじて保たれていたバランスが、微かな刺戟に突き崩される。

ビククンッ！ と秘割れを仰向けて跳ね上がる腰。

捻れた膣が愛液の霧を噴いた瞬間、

「あ、あああつ！ ダメエエエツ！ 出ちやう、出ちやうウウウウッ！」

ピュルッ！ ピュルル、ピユッピユッピユウ——ッ！！

生臭く香る小水が綺麗な弧を描いて迸った。

羞恥が爆発し、白く灼き切れる理性。

同時に、

「やひっ?! ひ、ひいいイイイイ!! オシッコ、オシッコが……イひイッ!!」

ピュルル、ピュルル、と小便を噴く恥部に、強烈な電流が渦巻く。性感帯と化した尿道が、熱い奔流に責め立てられているのだ。

恥ずかしいのに気持ちいい。

迸る小水に身体がビクビク反応し、意識は虚空へ吹き飛ばされてしまう。

「おやおや、なんとまあ」

「お漏らしするのがそんなに気持ちいいのですか？」

股間を濡らして気持ちよさそうに失神した幼い淫魔を見下ろし、群がった魔物たちはい

又チヨ、ニチヨ、又チユ……内側から押し上げられて柔らかく盛り上がった黒革パンテ
イの股布が、細指に撫でられるたび卑猥な音を立てた。割れ目から溢れ出した愛蜜に、裏
地がぬっちより濡れているのだ。流動する粘液にビラビラの隙間まで舐め回され、幼い肉
アケビに甘い感覚が膨れ上がる。

「あらあら、いやらしい手つき。この仔がメリエル様ですか？」

「違う。浅ましい牝犬だから、呼び捨てにしろ」

吸血鬼と変態メイドの声が聞こえていないのか、ラーニヤの尻に取りついた美女はふう、
ふう、と鼻息を荒げながら、小悪魔の瑞々しい尻肌を頬摺りした。シャクトリムシのよう
に這う細指が娘の拘束衣を外し——ぺろり、と捲られる黒いパンティ。

「なにをして……あら？ この仔、男の仔？」

「立派なモノだろう。お前にも生やしてやろうか？」

娘の尻を掴んで腰を擦りつけ始めた美女の股間には、凶々しく怒張した肉棒があった。
青筋を立てて捻れた肉棒、猛々しくエラを張った真つ赤な龟头——茹だったように紅い肉
畝の中に、根元が隠れている。女体の中でもっとも感じやすいクリトリスを呪われ、ペニ
スに作り替えられているのだ。

「は……母上ッ！ しつかりしてください！」

「無駄だ」

べちん！

唾液まみれの肉棒でラーニヤの頬を叩いたアマデウスが、唇を歪めて鋭い牙を覗かせた。ティアラで飾られた紅髪をクシャクシャと掻き乱し、

「メリエルは賢い犬だからな。主人以外の命令は聞かぬ」

「しゅ、主人って……」

「尻だ、メリエル。お前の娘だから、痛くないようたつぷり濡らしてやれ」

吸血鬼の命令を受けた美女は、白い細指を小悪魔の秘部に挿し込んだ。

「ふあうっ!? ああ、ダメ、ダメ……母上えっ!」

ヌチュ、ニチャ、ネチヨ……潤みの中を泳ぎ回る細指に、感じやすいピラピラが掻き回され、滲んだ蜜を拭い取られる。悦びに腰が浮き、背中の羽がパタパタとはためいた。

（そんな、こんな……悔しいっ!）

卑劣な吸血鬼に母娘とも玩ばれ、慰み物にされてしまうとは——腹を立てても、遅い。

ぬちよ、と引き抜かれた指がラーニヤの肛門に触れ、

「んっ!? ああ、やめ……ダメ、そこは……あううっ!」

紅い菊蕾に生温かなぬめりが塗り込まれる。

「ふあ、う、ンン……」

クニクニとマッサージされた尻孔に、甘い感覚が広がった。淫らさを武器にするサキユ

バスの身体は、穴という穴が性感帯だ。しかも、自らの尻尾を挿し込んでする肛門オナニーは、メイドに教えられて病みつきになってしまった大好物――。

「ほほう？ 血は争えぬな。母犬に尻穴を弄られてよがっているぞ」

「ラーニヤ様も、賢い仔犬でございますわ」

嘲笑う吸血鬼とメイドに見下ろされる中、四つん這いになったラーニヤの尻にメリエルの肉棒が擦りつけられる。

「あふっ！」

甘く蕩けた肛門を、グリグリこじ開ける硬い熱塊。

しごかれた菊膜に微弱電流が渦巻いて、太いモノがズズ、ズズ、と潜り込んでくると直腸粘膜に悦びが燃え上がる。

「ふあ……く、うううっ！ は、母う、えええええっ！」

ズズンッ！

奥深くまで貫かれた小悪魔は、細い手足を突つ張り、全身をプルプル震わせた。焼きつくような肛悦に腰骨が痺れ、下半身に力が入らない。うしろから圧された膣が歪み、甘酸っぱい蜜がブジュ、ブジュ、と噴き出してくる。

「ン、む、おお……！」

娘の熱い肉穴に肥大化クリトリスを締めつけられた美女が、ボールギャグを囁まされた

口から涎を垂らして背を反らせた。目隠しの下、瑞々しい頬が艶めかしく赤らみ、法悦の涙が溢れ出してくる。

「よし、いいぞメリエル。そのまま仰向けになれ。騎乗位にしてケツの孔を犯しながら、私が挿入しやすいよう、娘のオマ○コを広げるんだ」

「うっ!? だ、ダメ、母上……あううっ!」

叫びは無視され、細い身体が抱き締められて引き起こされた。抗おうとした腕にしなやかな尻尾がシュルン! と巻きつき、肘を伸ばしたままうしろへ引つ張られる。

「うう、くうう……あうんっ!」

母が仰向けに寝ころぶと、その腰に跨った小悪魔の直腸がグリリッと抉られた。角度を変えた肥大化クリトリスは排泄粘膜の奥深くまで貫いて、硬い亀頭の切っ先でS字結腸の口を突き上げてくる。

——ムニユッ!

尻尾に巻きつかれ、うしろへ引つ張られた手が、柔らかな膨らみに触れた。メリエルの豊満な乳房だ。ピアッシングされた乳首が小さな掌に押し潰され、仰向けに横たわった美女がビクッと腰を動かした。

「くあうう……ッ!」

抉られる排泄器官。

炸裂する肛悦。

指先がキュウツと曲がり、瑞々しい弾力に満ちた乳肉を揉み込むと、直腸粘膜に感じる淫棒がムクク、メキキッ！ と硬くなった。

（は、母上……感じて、いらっしやる……の？）

胸の内で呟いた問いに答えるように、メリエルの細指がラーニャの腰に絡みついた。瑞々しい柔肌を揉みながら秘部へ這い寄り、マシユマロのような肉畝を搔き分けて——プリッ！

弾けるように飛びだしてくる紅いビラビラ。

「うううっ！」

熱い血潮を溜めてぷっくり充血した粘膜花卉は、冷たい空気に触れただけでピンピン感じてしまった。甘酸っぱい潤みの底では幼い壺口がヒクヒク喘ぎ、細かく泡立った愛液を噴きこぼしてはしたなく焦れる。

「ほほう、意外に綺麗なマ○コだな。母娘とは思えぬ」

捌いたばかりのマグロのように鮮やかに紅い娘の秘部と、熟しきった柿のようにトロトロになった母の肉割れ。見比べて笑み崩れた吸血鬼はまず、美女の潤みに肉筆を浸した。

「ンあっ!? ン、オオ……」

ぬちゅ、にちゃ、ねちよ——鶏冠のように波打つビラビラを硬い亀頭にしごかれたメリ

エルが、悦びに打たれ、くぐもった呻き声をあげて身を振る。ラーニヤの尻孔の中で肥大化クリトリスがミチミチ膨らみ、

「あううっ！」

肛悦に喘いだ小悪魔は背後に伸した両手で母の乳房をムニユムニユ揉んだ。

(ダメ、ダメ……おかしく、な……るうッ！)

深々と潜り込んだ淫棒から、母の悦びが流れ込んでくるようだ。幼気な壺口がねっとりした愛液を噴きこぼし、あどけない粘膜花弁がヒクつくど濃密な牝香が漂いのぼる。

「見た目は全然違うが、さて、中身はどうかかな？」

「うう……あっ!! く……うううっ！」

ヌクチュ！ グリ、グリ、グリリッ！

母の蜜に濡れた淫棒が、ラーニヤの肉穴をこじ開けて中へ。

尻孔に太いモノを咥え込んだ小悪魔の秘部は、いつもより狭かった。

「う、ああっ！ 太いのが、こ、擦れて……ンく、ううう……ッ！」

グチュ、グチュ、と磨り潰される膣粘膜。イボもなく、捻れも浅いスマートなペニスなのに、これまで経験したどの男根よりも気持ちよかった。クサビ型の肉塊は恥丘の裏側をしごきながら奥へ、奥へ——根元までしつかりとはまり込み、硬い切っ先でラーニヤの膣奥をコツン、コツン、と叩く。

「ふあう、ああう、んううっ！」

コイツは敵だ、敵なんだ——頭の端で思っているのに、肉芯を突き上げられると凄まじい電流が背筋を駆け抜け、閃く白光に意識が切り刻まれた。

「可愛いお声。こういう声を出しているときは——」

よがる小悪魔の胸にメイドの手が伸び、拘束衣の金具をパチパチと外す。薄い黒革が捲られ、現われたのは、桜色に火照った幼い微乳。背後の母親とは比べるまでもなく、一応女の子ですよ、と申しわけ程度に膨らんでいるだけだ。

だが、悦びに膨れた乳首は違う。

「魔晶石のピアスカ。オシャレだな」

「ひゃひんっ！」

ピン、と弾かれた肉豆には小さな魔晶石に飾られたピアスが施されていた。流れ込む魔力に内側から刺戟され、小指の先くらいの大きさに勃起している。幼い胸丘とは対照的に、いやらしい肉突起。視線を浴びただけでも感じてしまう性感帯は、ピクン、ピクン、と震え、乳頭に白い滴を膨らませていた。

「なんだ、乳も出るのか？ 私の知っているラーニヤ姫ではないようだ。いつの間にこないやらしい身体になったのだ？」

嘲笑う吸血鬼に、

「なにをいまさら。娘の尻孔を犯してよがっている変態の
サディステイックな悦びに頬を赤らめたメイドが応じる。」

「さあ、メリエル様。御息女の尻尾でございます。たんとおしゃぶり遊ばせ」

美女の口からボールギヤグを外したルイは、ラーニヤの感じやすい尻尾を掴み、唾液に濡れた唇に鏝型の尖端を押しつけた。

「ンあ……ら、ラーニヤ……」

ハムツ！ ムチュウ！ チュチュチュウ！

「えああつ!? は、母上、母ううう、ええええつ！」

舐めしやぶられた尻尾に電流が走り、母の腰を跨いで仰け反った幼い身体がビクンビクンと激しく痙攣。熱い肉塊を深々と啜え込んだふたつの肉穴が鋭く窄まり――。

じゅ、ちゅ！ むちゅ！

卑猥な音をこぼして揉み搾る動き。

「うむ。まあまあだな。メリエルには負けるが、魔界一の肉奴隷と比較しては可哀想だ」
青白い顔に血を上らせた吸血鬼は、悶える少女の腰を掴み、腹を擦りつけるように突き上げた。

グジュポッ！ グジュポッ！ グジュポッ！

「えあつ!? えあああつ！ あううつ！ 奥に、おく、に、いいいっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>